

焼塩壺の研究史・現状

岩本 正二

日本塩業史研究文献目録（焼塩壺編）は、主に日本における戦国時代～江戸時代の塩容器に関する考古学的研究や発掘資料を対象としている。圧倒的多数は焼塩壺に関するものであり、ここでは焼塩壺の研究史と現状について簡単に触れてみたい。

焼塩壺とは、商品としての「壺焼塩」を収納した小形の蓋付き土器であり、焼塩の製造と流通・保管容器を兼ねている。江戸時代には江戸でその存在が注目されていたが、1920年代以降になって、焼塩壺の検討が始まった。その後、開発事業に伴う中・近世遺跡の発掘調査が、全国各地で行われるようになった。特に東京では江戸遺跡の発掘調査が本格化した。これらの発掘調査で、多くの遺跡から焼塩壺が出土し、研究の対象となった。代表的な研究に渡辺誠の研究がある。焼塩の用語や複数の焼塩壺業者の系統を整理し、身と蓋の対応を含めた器形分類、刻印の分類、編年・時期設定など多方面にわたって検討された。その後も、焼塩壺の成形技法、成形技法と刻印との関係、生産業者の系統と成形技法・刻印、刻印の模倣、年代観、使用形態、胎土分析から産地の検討など、様々な研究が行われた。その集大成が「小川望 2008年『焼塩壺と近世の考古学』 同成社」で、この内容を簡潔にまとめたのが「小川望「焼塩壺」『江戸の土器』考古学ハンドブック 19 ニューサイエンス社 2019年」である。以下は小川望の見解を中心に紹介して、現段階における焼塩壺の研究状況の一端を述べてみたい。

焼塩壺の生産地（業者）は複数あり、壺の成形技法や刻印との関係、文献との対比から、1は「藤左衛門系」、和泉国湊村（堺市堺区東湊町・西湊町）で、藤太夫を祖として藤左衛門、伊織を名乗った系統である。2は「泉州麻生系」、和泉国麻生郷津田村（貝塚市津田北町・津田南町）で、正庵を祖として、丹羽源兵衛を名乗った系統である。3は「泉州磨生系」、奥田利兵衛を名乗った系統である。4は「焼塩屋権兵衛」を名乗った系統である。また、無刻印の焼塩壺が多数あること、刻印を模倣したものがあることから、このほかの系統も存在した可能性が考えられるが、現在はまだ不明である。江戸に搬入された焼塩壺は、圧倒的多数が関西産である。関西以外でも、宮城県仙台市周辺、石川県金沢市周辺、福岡県柳川市周辺、大分県大分市周辺（？）で、焼塩壺が生産されていた。また、江戸時代後半になると、江戸近郊で、ロクロ成形の焼塩壺が生産されていたと想定できるようになった。

焼塩壺の生産は、史料との対比で、和泉国において天文年間（1532～1555年）に始まったと推定されている。戦国時代の焼塩壺は、堺・大坂・京都周辺で出土しているが、江戸では未確認である。焼塩壺は江戸時代前半では関西産が主流を占め

るが、江戸時代後半になると江戸近郊産の割合が高まる。そして、江戸時代末・明治時代初頭（19世紀中頃）になると衰退する。この衰退要因はまだ解明されていないが、おそらく武士階層の解体による生活スタイルの変化であろう。このように、中世末に和泉国で生産が始まった焼塩壺は、当初は社会上層部の贈答品であったが、江戸時代後半になると、都市としての江戸では庶民階層にも及ぶものになったと考えられている。